

戦火に散ったアスリート ⑬

小川 年安

アニキ金本に新井、それに助っ人シートと近年のすつかり強い阪神は、広島からの移籍組がいたからこそ。それは球団誕生時も同じで、カーフがなかった時代、藤村富美男ら広島出身の選手が、チームを支えた。初代正捕手の小川年安もそのひとり。金本の先輩となる旧制・広陵中学から慶大を経て、大阪タイガース創設と同時に入団した。初代司令塔は、将来の監督候補とさえ目されたが、戦争で尊い命を奪われている。

(新聞うずみ火・吉岡雅史)

巨人・沢村攻略の急先鋒

肩が強くて、バッティングもよく、しかもイケメンのキャッチャー。今の球界なら、さしずめ阪神の矢野だが、その昔、小川こそが、まさにこのタイプだった。

日本のプロ野球が船出した1936(昭和11)年。背番号2の小川は3番を打ち、チーム最高の打率3割4分2厘を残している。特に、みんなが手を焼いた巨人・沢村攻略の急先鋒となった。

4番でキャプテンだった松木謙治郎は、のちに著書で「小川は美男子で慶応だけに人気があった。甲子園のアパートにはよく女性のファンが訪ねてきたが、いつも居留守を使って



小川(右)は戦地で偶然、巨人のエース沢村と再会する。場所は不明

明大は40分に及ぶ抗議をしたが、当然受け入れられない。三塁ランナーが生還して同点となつて試合が再開され、9回裏2死から小川が三塁打で出塁すると、次代者がタイムリーを放つて、サヨナラゲーム。さらに2年後の33年には、有名

な水原のリンゴ事件^①が起きた。秋の早慶3回戦は、微妙な判定が重なって球場全体が不穏な雰囲気となり、9回表に1点リードしていた早稲田の応援席から投げ込まれた食べかけのリンゴを、慶応のサード水原が投げ返した。これだけなら何事も起きなかったのかもしれないが、その裏、慶応が2点を挙げて逆転サヨナラ勝ちしたことで、早稲田応援団が慶応ベンチと応援席になだれ込み、日本の野球史上最悪の乱闘事件となった。またしてもサヨナラの口火を切ったのが、慶応の4番・小川のヒットだった。

となり、ここで球史に残る事件は起こった。1点を追う5回、1死二、三塁で、ゴロをさばいた三塁手からの本塁送球が高くそれた。次の瞬間、小川のミットが宙を飛んだ。

仮にボールに当たって捕球できたとしても、ルールではランナーの進塁は認められる。草野球でも「三塁打になる」ことは浸透していて、まず起こりえない珍プレーだ。

90年に及ぶ高校野球の歴史で、ミットを投げてまでボールを止めようとしたのは、この1件のみ。プロでは昨年、ロッテのオーティズ二塁手が西武戦で打球にクラブを投げつけて物議をかもした。あとで本人は泣いて反省し、西武の黒江ヘッドコーチ(当時)も「40年以上の野球人生で、初めて見た」と驚きを隠せなかった。

なぜ小川ほどの名選手が、大舞台でこんな初歩的な「ヘマ」をやらなかったのか、本人のコメントは残されていない。ただ、追加点を与えまいと必死だったことは、伝わってくる。ルールうんぬんではなく、きつと必死そうだったのだろうと思う。

念のため、選抜優勝2回、夏は1947年の準優勝が記憶に新しい広陵高校の中井哲之監督(46)に、助けを求めたが、「昔すぎて、全然分かりませんわ」と、予想通りの返事が帰ってきた。

慶大でも

三原ホームスチール事件

慶応大学進学後も小川は、31年春の早慶戦で、「三原のホームスチール事件」に巻き込まれた。早大・三原脩(のちに巨人監督)のホームスチールそのものや小川のタッチに問題はなく、球審が東大の野球部員で、タイミングはアウトなのに判定セーフだったことから、騒ぎは大きくなった。

正式な審判ではなく、現役学生がジャッジするはめになったのも、小川が所属する慶応の試合に発端があった。「八十川(やそがわ)のボク事件」である。

この年の春の慶応―明治戦で、8回裏に明大の八十川投手の牽制球を巡り、明大が残りの全試合を放棄し、審判団も全員辞職する騒動へと発展した。

これはルールが改正されたことが、明大サイドにだけ伝わっておらず、連盟の落ち度だったことがのちに判明した。

皮肉なことに、八十川は小川と広陵でバッテリーを組んでいた。このコンビが開発したのは、三塁に投げると見せかけて一塁走者を刺す、今では当たり前前の牽制だが、当時としては画期的なトリックプレーだった。

大リーグ選抜チーム来日 ファン投票で捕手部門トップ

八十川事件の31年秋、ルー・ゲーリッジャースーパースターぞろいの大リーグ選抜チームが来日し、迎え撃つ日本選抜はファン投票で選出され、小川は堂々捕手部門トップで選ばれている。

職業野球が創設されることになると、35(昭和10)年暮れに大学を中退して大阪タイガースに入団した。プロ1年目の暮れに召集され、東京の第一電信連隊に入隊。偶然、中国の野戦病院で沢村と再会し、家族へ写真を送っているが、軍事機密として「場所は書けません」と記

している。一度除隊したところまで判明しているが、小川がいつどこで死んだかは不明のままである。享年は一応、26歳とされている。

前述した打率3割4分2厘のほか、プロでの成績は出場42試合で30打点、キャッチャーながら8盗塁が光る。戦後、阪神の監督にもなった松本は、もし復員していたとすれば、球史に残るどころか人柄からみて、戦後は必ず監督にもなっていたらうと惜しまれる」と述懐している。

確かに、生きてさえいれば選手として指導者として、ファンの視線を釘付けにする存在になっていたことだろう。

いぢみせい(の) ヨコシマ日記



プロ1年目で招集

「復員していれば、戦後は必ず監督に!」